



# 性感ヨガレッスン

～柔肌美女に囲まれて～

大泉りか

挿絵／ロッコ

立ち読み版



レッスン1	年上の美女ヨガインストラクターの筆おろし	4
レッスン2	セレブ妻の肉食系フェラチオ	66
レッスン3	憧れの従姉の肛門遊戯	133
レッスン4	H C U P グラドルの揺れ乳ロストバージン	185
レッスン5	軟体美女たちの5P 乱れ饗宴	230

**矢野 浩一郎**

(やの こういちろう)

二十一歳の大学生。憧れの従姉であるゆかりに勧められてヨガ教室に通うことになる。

**北上 沙里奈**

(きたがみ さりな)

ヨガ教室の経営者兼インストラクター。はきはきとしたスポーティーな美女で、筋肉質のしなやかな肉体を持つDカップバストの二十九歳。

**矢野 ゆかり**

(やの ゆかり)

浩一郎の従姉。雑貨の輸出入の仕事をしており、奔放快活な性格でアジア放浪旅行が趣味。細身ながらDカップバストを持つ二十四歳。

**小林 梨香**

(こばやし りんか)

十八歳の現役グラビアアイドル。ムチムチした肉体にHカップの巨乳。ダイエットと柔らかい身体を手に入れるためにヨガ教室に通っている。

**小川 可奈子**

(おがわ かなこ)

健康と美容のためにヨガ教室に通っている三十四歳の人妻。良妻の見本のような上品な女性で、色白でキメ細かな肌とEカップバストの持ち主。



## レッスン1 年上の美女ヨガインストラクターの筆おろし

「ううっ……女の人ばっかりだ……」

やのこういちろう 矢野浩一郎は、窓ガラス越しに部屋の中を覗き込んで呟いた。

夕闇に包まれ始めたこちら側とは裏腹、ぽつと明るいフロアの中にいるのは、ぴつたりとした練習着を身につけてヨガレッスンに勤しむ女性たち。男性の姿はひとつもない。

（まあ、想像はしていたけど……男なんて、やっぱりひとりもないじゃないか……）  
つい数日前のことだった。風邪をこじらせて寝込んでいた浩一郎のもとに、従姉の矢野ゆかりが見舞いに来た。

その際に、アジア雑貨の輸入の仕事をしているゆかりが、つい最近出張でバリ島を訪れた際に知り合った白人女性に勧められて、毎朝のヨガを日課としたところ「めちやくちや体調がいい」とかで、浩一郎にもヨガを勧めてきたのだった。

最初はヨガなんて……と思っていたものの、肩こりも腰痛も治る、身体が軽い、痩せるなど美辞麗句を並べ立てられ、もともとゆかりに密かに憧れの気持ちを抱いてい

たことも手伝って少し心が動いた。

奇しくも季節は春。

何か新しいことを始めるのも悪くはないかと思っていた、大学三年になったばかりの帰り道。通りかかった道にヨガ教室の看板を見つけて中を覗き込んでみたのだった。（これは……僕には無理だよ、ゆかりねえさん）

四月も中旬を迎え、桜の花はもう散ってしまったといっても、夜になるとまだ寒い。病みあがりの身体に無理をさせてはいけないと思いつつ、さっさとそこを立ち去ろうとしたその時、ドアが内側から開いて女性が顔を出した。

「あら、君、見学者？　ねっ、ねっ。そんなところから覗いてないで、中に入ってねっ？」

年の頃は二十代後半だろうか。さっぱりとしたショートボブに縁取られた顔に、親しみやすい微笑み。くるんと動く大きな目が活発そうなイメージを与える。

贅肉がまるでないお腹が丸出しになった胸下文のタンクトップにヨガパンツ。さっきまで鏡の前でヨガポーズの見本を見せていたから、おそらくはインストラクターだと思われた。胸元に玉の汗が浮かび、トップスにまで染みてうっすらと変色していた。びつたりとしたヨガパンツがむっちりとした尻に張り付いて、その丸みを惜しげもな

く曝け出している。

悩ましさをさえも感じさせる運動直後の姿に加え、鍛えられた肉体が放つ健康的な色気にどくと胸が高鳴ってしまふ。

「いや……あの……そういうわけじゃ……」

「チラシを見て来てくれたのかしら。嬉しいわあ。ね、ほら、入って入って、遠慮しないで、ねっ？」

女性は、ほわーっと見惚れている浩一郎の腕を強引に掴むと、ぐっと中へと引きずり込んでしまった。

（うわっ、どうしよう……外から見てるだけのつもりだったのに……）

華奢だが、思いのほか強いその力に引きずられるままに、教室内へと入るとむっとした熱気とともに、甘酸っぱい汗の匂いが鼻をくすぐった。

（なんだか女の人だらけで緊張するよ……）

十人ほどだろうか。インスタクターの女性に連れられて教室内に足を踏み入れた浩一郎に、皆、振り返って好奇を込めた視線を送る。

（ううっ……は、恥ずかしい……）

まるで女子高にでも紛れ込んだようだ。むずむず虫が騒ぎ立てるように身体が疼き、

緊張のせいか胸がドクドクと高鳴る。

「あと十五分くらいでレッスンは終わるから、君はそこに座って見学してて」

「は……はい……」

(ど、どうしたらいいのかな……)

なんだか困ったことになってしまった。そう思いながらも、仕方なく壁際の隅に腰を下ろすと、腰が据わらない思いでインストラクターへと視線を向けた。

「ねえ、どうだった？」

レッスンは終わると、インストラクターに呼ばれ、教室の裏にある事務室へと連れていかれた。

「ええっと……どうって……あの……」

正直に言えば、ほとんど授業風景を正視できていなかった。

なぜなら、レッスンに励む女性たちが、何から何までいやらしすぎるのだ。

上は四十代から下は十代らしき少女まで、さすがはヨガで身体を磨こうというモチベーションを持っているだけあって、皆、ルックスもスタイルもいい。

その上、ヨガ用のコスチュームというのは身体にぴったりとくっつくタイトなライ

ンが基本らしく、ポーズを決めるたぐいにおっぱいやお尻がやたらと強調されてしまうのだから、童貞の浩一郎には刺激が強すぎるの一言だ。

「入会、してくれるかしら？」

「あの……いきなりそんなことを言われても……まだ決めかねるといふか……」

「あらあ、だって、わざわざ見学に来てくれたんだから、興味はあるんでしょ？」

「いえ……通りすがりに気になって覗いてみただけなんで」

「ええっ……そうなの？ なあんだ。わたしつてば、てつきりチラシを見て来てくれたのかと思つてた。ほら、これの」

インスタトラクターは浩一郎を回りこんで、事務机の前に腰を下ろすと、机に重なつていた書類をまとめて拾い上げた。トン、と颯爽とした仕草でデスクに打ちつけた後、差し出す。

——う、うわあ……谷間が……。

浩一郎よりも少し低くなつた場所にいるために、タンクトップの襟ぐりから、深い谷間が覗いてしまつていた。すべすべと陶器のような乳肌に釘付けになりそうな視線を無理やりに剥がすと、書類に目を移す。

『男性会員様、モニター三ヶ月無料キャンペーン』



そこには、大きな文字でそう書かれていた。

「わたしはこのヨガ教室のオーナー兼、インストラクターの北上沙里奈きたがみさりな。よろしくね。実は、わたし、男性会員を獲得したいと考えているのよ」

「は……はあ……」

「それで、こういうチラシを作って撒いてみたものの、一週間経つても反応はゼロ。問い合わせすらないって状況なワケ。そんな時に君が現れたものだからヤッター！ って思ったのに……なあんだ、せっかく喜んだのにがっかりだわあ」

沙里奈はふう、とため息をつく、と、ふてくされたように机に頬杖をつけて浩一郎を見上げた。年上の女性に、そんなことを思うのはおかしいかもしれないが、表情がころころと変わる様が可愛らしい。

「……でもさ、君、覗いてたつてことは、ちょっとくらは興味があるのよね」

「あ、はい。あの……従姉に勧められて……でも、ちょっと僕には無理かなあ、なんて」

「なんで？ 無理なことなんてないわよ。ね、いいじゃない。これもいい機会だと思つて入会してくれないかな」

「いや、でも、まるつきり未経験ですし、身体も硬いし……」

「誰だって最初は初めてだし、身体なんてやっているうちにどんどん柔らかくなるから大丈夫！」

「で、でも……」

「それに、ほら。今なら無料なのよ。いいじゃない。ねっ、わたしを助けると思っ、入会してくれない？ この通りだから、ねっ？」

沙里奈は椅子から跳ねるように立ち上がるとペコリと頭を下げた。

胸がぼわんとバウンドして揺れ、まるく開いたタンクトップの襟ぐりから深い谷間がぐっと覗く。うっすらと血管の透けた白い肌がふるふると揺れて、思わず手を伸ばしてしまいそうになるのをぐっと理性で押さえ込んだ。

「そ、そんな……あ、頭を上げてくださいよ」

「……じゃあ、入会してくれる？」

ふにりと寄った乳間に、視線を盗まれながらドギマギして言うと、沙里奈は上目遣いで浩一郎の顔を覗き込んだ。

（ううっ……強引だけど……こんなふうに頼まれたら断れないよ……）  
もとより押しに弱い性格だ。

「は……はい……では……試しにということだ」

こうして大学の授業の合間に、ヨガ教室へと通うことになったのだった。

「浩一郎くん、だいぶ慣れてきたみたいね、けっこう素質、あるんじゃないの？」

沙里奈にやや強引に誘われて通い始めたヨガ教室だったが、二週間も経つとすっかり馴染むことができた。そして今日、六回目になるレッスンを終え、教室の隅で持ってきたペットボトルの水を飲んでみると、同じくレッスンを終えたばかりの小川可奈子が話しかけてきた。

「いやいや、僕なんて……可奈子さんみたいにちゃんと足も上がらなくて。お恥ずかしいです……」

「うふふ。わたしなんて暇な主婦だから。暇さえあればお教室に通っているせいよ」

可奈子はタオルで首筋の汗を拭くと、後ろでひとつに留めた髪飾りをさつと外した。よく手入れのされたつやつやの髪がさらりと解けて、ふわりと甘ったるい香りが鼻をくすぐる。

可奈子は三十四歳。テレビなどで言われているいわゆるセレブ妻というものだろうか。専業主婦だというが、いつも上品かつおしゃれな服装をしていて、浩一郎の母親やそこらで見かける、いわゆる「おばさん主婦」とはまるで違う。

しなやかな身体のラインがはつきりとわかるタイトな長袖のカットソーと、細身のヨガパンツに包まれたスタイルだつて少しも崩れていない。それどころか、成熟しているというに相應しい素晴らしいスタイルだった。

母性を感じさせる大きなバストはいかにも柔らかさそうで、その下の腹はぺたんと平らながら、女性らしいうっすらとした脂肪をまもっている。ぐっと張り出した尻はでかく、すつと優雅なカーブを描く柳腰が悩ましい。

年相応の落ち着きと色気を持った、可奈子のような成熟した女性に出会ったのは初めてで、最初は物怖じして近づくことさえできなかった。

が、話してみると以外にも可奈子は気さくだった。

おそらくは、教室にひとりだけの男性である浩一郎に気を使ってくれたのだろう。初めて授業を受けたその日に可奈子のほうから話しかけてくれて、それ以後、顔を合わすと日常会話をかわす関係になった。

「あら、やあね。暇な主婦だなんて。毎日、いろんなお稽古ごとで忙しいなか、ちゃんとヨガにも通ってくれていて、嬉しいわ」

ヨガマットを片付けていた沙里奈が聞きつけて口を挟んだ。

「だって、最近、わたし、ヨガをしないとなんだか調子悪いのよ。肩も凝るし、血の

流れが滞っちゃうっていうか。こんな身体にして、沙里奈さん。責任とってね」

それを受け可奈子が、黒目がちの目で沙里那に婀娜あだっぽい視線を送る。

「そうそう、浩一郎くん。これ、この間、言っただボディクリーム。これを塗ってからリンパを流すヨガをすると、身体が本当にすつきりするの。ぜひ、試してみてください」

「わあ、ありがとうございます！」

可奈子が差し出してきたのは、小さなチューブに入ったボディクリームだった。透明のパックに入れられて、おしゃれなシールで封されている。

こうして物の受け渡しひとつするのでも、年上女性らしい気配りと育ちの良さが感じられ、好感を覚えてしまう。

「あれえ、うわあ、いいなあ。それ、ハワイでしか売ってないヤツだあ！」

手の中にちんまりと納まっている年上女性からのプレゼントに、自然と浮かび上がる笑みを堪えていると、隣の少女が浩一郎の手元を覗き込んで、可愛らしい叫び声をあげた。

——うわあ、おっぱいのコだ……。

先ほどまで同じクラスでレッスンを受けていた少女だ。驚くほどにグラマラスな体つきをしていたために、強く印象に残っている。

もうひとつ、少女の印象を深めていたのは、その年齢だ。

ヨガ教室に通っているのはやはり、社会人をしているOLさんや主婦が多い。浩一郎は唯一の男であると同時に、今までのクラスでは常に一番年下だった。

が、目の前の少女は浩一郎よりもおそらく年下に見える。

童顔で、つぶらな瞳にほんのりピンク色の頬が可愛らしい。

しかし、裏腹にその下の身体は、十分に成長していた。フリルのついた可愛らしいカットソーに包まれた胸は、まるで西瓜すいかのようなボリュームで、少女が身じろぐたびにふるふると柔らかさそうに揺れる。

——さつき遠くから見てても、すごいと思ったけど……近くで見るとよりすごい迫力だ……。

あまりじろじろと見てはいけないとわかってはいるのだが、男の性さがかついっつい視線が向いてしまう。が、あまり見ているのは目の毒でもある。股間にじんじんとした痺れはじが奔はつて、たちまち熱が籠もりはじめるのがわかった。これはマズいと無理やりに視線を上げると、今度は少女の愛らしい顔が目に入った。

——あれ……このコ……初めてだっけ？

見覚えがある気がした。しかし、同じ大学にこんな可愛いコがいたら絶対にわから

ないはずはないし、高校時代の同級生とも違う。道端ですれ違ったとか、電車でよく一緒になるというのも違う気がする。

——誰だったっけかな？

「ねえ、何の匂い？ バニラ？ ココナッツ？」

釈然としないでいる浩一郎の腕に、少女は無造作に身体を押し付けて尋ねてくる。

——うわっ……あ、当たってる……。

ぼわぼわとした膨らみが腕に触れ、全神経がそこに集中してしまう。が、少女はまるで気にする様子もなく、ぐいぐいと押し付けてくる。

「ねえねえ、これって、オーガニックで超有名なブランドのクリームだよりんかね。梨香、ロケでハワイに行った時に買ったことあるけど、めっちゃくちゃいい匂いで気に入ったんだあ。でも、もう使い終わっちゃって、日本じゃ手に入らないしって思ってたんだけど、いいなあいいなあ、ね、どこで手に入れたの？」

「あ……あの……可奈子さんにいただいたんだけど……」

ドギマギしながら応えようと、顔のすぐ横で揺れる薄茶色の髪の毛からシャンプーの匂いが香った。続いて、思春期の少女独特の、少し甘酸っぱい汗の匂いが鼻をついて、胸がドキドキとしてしまう。

しかし、あくまでも少女は無防備だった。大きな瞳を好奇心でキラキラと輝かせながら至近距離のままだ。

「あつ、可奈子さんかぁ。なるほどっ！　ね、可奈子さん、これ、どこで買ったんですかぁ？」

「ああ、それ、夫がハワイにフライトに行った時に買ってきたの。まだ家にあるから、梨香ちゃんにもあげるわ。今度持ってくる」

「わあっ！　本当ですかぁ」

「ええ。こんなものでよければ。ね、沙里奈さんにも持ってくるわね」

「あら、ありがとう。嬉しいわ。いいの？」

「いいのよ、夫が出張に行くたびに買ってくるんだもん。使いきれたモノじゃないわ」

「さすがはセレブ妻なんだぁ。旦那さん、パイロットなんて、すっごいですよね!!」

「そんなことないわよ。出張ばかりで寂しいもんよ。梨里ちゃんもまた、いつでもご飯を食べにいらっしやい」

「やったー！　可奈子さん、お料理上手なんだもん。嬉しいっ！」

梨香と呼ばれた少女は、ぴょんと前のめりにジャンプすると可奈子に抱きついた。浩一郎の腕からおっぱいが離れ、ほっとしながらも、今度は、もう少し触れていたか



つたと惜しむ思いが沸き起こる。と、少女が、くるりと浩一郎のほうへと向き直った。「ね？ 君が噂の彼だよ。この教室にモニターで入った初の男性っていう……」

「は……はい……そうですけど……」

「へえっ。ヨガする男の人なんて、どんなインドかぶれの人かなくって思っていたら、ぜんぜん普通でよかったあ！ っていうか結構カッコいいし！」

「あ、ありがとうございます……」

褒められているようだが、その勢いに押されてタジタジとしてしまう。

「相変わらず、梨香ちゃんは元氣ねえ。いいなあ、その若さ。わたしにもそんな頃があつただけどなあ」

「やあだあ。沙里奈さんつては何いつてるんですかあ。梨香なんてまだまだガキんちよですよ。早く沙里奈さんや可奈子さんみたいにな、色っぽいオトナの女になりたい！」

沙里奈も少女の快活とした様子に笑いを堪えて言うと、梨香がつんと唇を尖らせて拗ねるような表情を作った。

——それにしても誰だっけ？

絶対に見覚えがあるのだが、どうしても思い出せずにもやもやとした気持ちだ。

「んー、なに？ 梨香の顔に何かついてる？」

浩一郎の視線に気がついたのか、梨香が可愛らしく首をかしげた。

「いや……そうじゃなくって……どこかで会ったこととかありますか？」

「会ったことはないと思うけど……もしかして雑誌とかで見てくれたのかな？」

「雑誌？」

尋ね返すと、梨香はぽつと頬を赤らめて照れたような笑みを浮かべた。

「うん……実は、梨香、アイドルやってます！」

「ア、アイドル!!」

芸能人をこんなに間近で見るのは初めてだ。驚きとともに、妙に得した気分を覚えているのは、ミーハー心からだろうか。

「まあ、そんなに売れてるってわけでもないけどね」

「で、でも雑誌とかテレビとか、出てるんだよね。あと歌ったりとか」

「うん。ラブ組っていうグループにいるんだ。それでライブしたり、あとはグラビアをやったり」

「グラビア……」

ということとは、水着姿になったりもしているのだろうか。

——すごいなあ……沙里奈さんは若いのに、ヨガ教室のオーナーだし。可奈子さんの旦那さんはパイロットだっていうし、梨香ちゃんはアイドルだなんて……なんだか別世界に来たみたいだ。

「浩一郎くんってば、やあね、なんでそんなボーっとした顔してるのよ。そんなに梨香ちゃんが気に入った？」

「いや、そういうんじゃないかって……あのっ……」

「ええっ、なにそれ、梨香はダメってこと？」

カルチャーショックにほわーっとしていた浩一郎に、沙里奈がからかうような視線を向けた。慌てて打ち消すと、梨香がぷくっと思愛らしく頬を膨らませる。

「……あの……みんな仲良くっていいなって思っただけですっ！」

今まで出会ったことのないタイプの女性たちと、こんなふうに関わり合えて話せるだけだ。

——最初はヨガなんてって思っただけ……始めてよかったな。

新鮮な思いにワクワクと弾む胸を落ち着かせるように、ミネラルウォーターを一口、飲み下した。

「ねえ、矢野くん、着替える前に、ちよつとお願ひがあるの」

可奈子と梨香と別れ、更衣室へと向かおうとしていると、ヨガマットを手に持った沙里奈に呼び止められた。何かと思つたら、浩一郎がヨガのポーズをとっている写真が撮りたいという。教室のブログに載せるためだというが、正直いつて照れくさい。

しかし、無料のモニターという立場では断ることもできずに頷くと、床へと敷かれたヨガマットの上に腰を降ろした。

「これからどうやって上達していくかを見せるのも目的だから、無理しなくていいのよ」

「は、はい……」

「じゃあ、最初はうつ伏せになつてくれる？ それでそのまま上半身を持ち上げて、静止して」

「はい……」

言われるがままにポーズを取ると、沙里奈は手に持ったカメラのシャッターを切る。それほど難しいポーズではないが、インストラクターである沙里奈の前でマンツーマンでしていることを考えると妙に緊張してしまう。

——ちゃんとできてるかな……。

少しは慣れたといっても、まだまだ初心者だ。教室の誰よりも身体だつて硬い。不恰好なポーズをとっているであろう自分の身体を、沙里奈に冷静な目つきで見回されていることに恥ずかしさを覚えてしまう。

「少し顎が上がってるわね。もうちよつと下げてみて。それで大きく深呼吸して、ゆっくりゆっくり息を吐く」

沙里奈の指示にしたがつて息を吐くと、背筋が伸びた。腰の辺りに痛み混じりの気持ちよさが奔る。

「沙里奈さん、また！」

「お先に失礼しまーす！」

そのまま数ポーズの撮影をこなしていると、着替えを終えた生徒たちが更衣室から出てきて、そのまま帰っていった。全員が退室すると、妙な静けさが教室内へと奔る。

——ううっ……緊張しちゃうよ……。

かすかな衣擦れとはっはっという息遣いに混じり、時折沙里奈の押すシャッター音が響く。

今日も沙里奈は、臍が丸出しのスポーツブラタイプのタンクトップにびったりとしたパンツというヨガウェア姿だ。レススン着とはいえ、相当な露出度で、とても外を

歩けるような格好ではない。そんな煽情的な格好の美女とふたりきりという事実を今更思い知らされて、緊張は高まっていくばかりだ。おまけに、写真を撮るために、屈んだり、膝を立てたりとするたびに、ピチピチのヨガウェアに包まれた、むっちりした身体が、どうだとはかりに主張をしてくる。ぴっちり尻に張り付いたパンツは裂けてしまわないかと心配になるほどだし、タンクトップの襟ぐりは大きく開きすぎているせいで、今にも大きな乳房がこぼれてしまいそうだ。

「あ……あの……沙里奈さんっていつからこの教室をやってるんですか？」  
「わたし？ そうね、もう二年になるかしらね」

照れ隠しに話しかけると、沙里奈はふっと視線を遠くにやって言った。

「その前はどこのヨガ教室に通っていたんですか？」

「そうよ。OLをしながら全米アライアンスの資格を取ったの。それで一年で独立したってわけ」

「ええっ……OLさんだったんですか？」

「わたしがOLなんておかしいかしら……はい、次は胡坐あぐらで瞑想のポーズ」

予想もつかない答えが返ってきたので、驚きの声をあげると、沙里奈は悪戯っぽい顔で笑いながら、浩一郎の体勢を指示した。

「痛たたたたっ」

胡坐といつても瞑想のポーズでは足の裏同士を合わせることを求められる。股関節にヒリヒリとした痛みが奔って筋がひりつと伸びた。

「ふふふ。無理しなくていいから、ゆっくり呼吸して、思いつきりリラックス。そうそう。このポーズは交感神経が活発になるのよ……」

沙里奈は自らも浩一郎の隣に並ぶと、同じく胡坐を組んだ。そうして背筋をピンと伸ばすとぼつりぼつりと言葉を継ぐ。

「OLっていうか……広告代理店で働いていたんだけど、激務とストレスで身体を壊しちゃったのよ。で、ヨガに出会って、思い切って転身したってわけ。情けないわよね、憧れて、ずつと勉強して、ようやく入った会社を五年もしないで退社だなんて」  
「なるほど……やっぱり社会人って大変なんですわね……ああ、やだなあ」

こんなに健康そのものといった沙里奈が転職を決意するだなんて、どんなに過酷な職場だったのだろう。来年の就職活動のことを思えば、浩一郎も人ごとではない。

「そうね……でも、後悔はしてないわ。ヨガっていう新しい道を見つけたらしたし。それに、いつかは誰もが社会に出ないといけないじゃない？ 今の君にできることは、社会に出るまでにできるだけたくさんの経験をすることよ。ヨガもそのひとつ。それ

にね、ヨガは強い心を作るのにもいいの」

「心……ですか」

「そうよ、ストレスに強いハートが作れるわ。だから、君は大丈夫。社会に出ても負けない心と体にするために、わたしが特別にたーっぷり鍛えてあげるから」

「は……はい……」

嬉しいような、それでいて照れくさいような気分だ。

「じゃあ、今度はハトのポーズを取りましょう。わたしの動きを真似してね」

沙里奈は腰を上げると、浩一郎の正面に腰を下ろし、両脚を右側に流して横座りした。そうして、右足の膝を床につけたまま、足を逆向きに立ててつま先を持ち上げると、後ろに回した左手をその足首に引っ掛けて静止する。

——うわぁ……お、おっばいが……。

胸がつんと突き出した形になっているせいで、ただでさえ豊満なバストがより強調されて見えた。もっこりと盛り上がっていた膨らみが呼吸に合わせて上下し、U字型に開いた首元から覗く谷間が、まるでできたてのゼリーのようにふるふると震えている。

ヨガパンツの股間はふっくらと盛り上がって、布越しにうっすらと肉畝が浮き上がっているのさえも見える。きゅっと括れたウエストからなだらかに続く、丸みを帯び



たヒップラインが、艶なまめかしく少年の欲情をそそる。

——ふ、ふたりきりで、こんなふうにに身体を見せ付けられて……ど、どうしよう……。

股間がきゅんと痺れるのがわかった。

——た、勃たったらヤバイよ……。

スエット素材のズボンを身につけているために、もしも勃起でもしようものなら、すぐにバレてしまうだろう。

——う……ううっ……何か違うことを考えないと……。

しかし、焦る心中とは裏腹にいつい視線は、大人の女性らしくほどよく熟成された色香を放つ沙里奈のボディラインをなぞってしまふ。

胸がざわついて、股座にどくんと血流が流れ込むのがわかった。

「はい、じゃあ、今度は浩一郎くんが試してみて」

しかし、胸騒ぎの時間はそう長くはなかった。沙里奈はあつという間にポーズを解いてしまったのだ。

ほつとすると同時に、少しがっかりした思いがこみ上げてくる。

——でも、あれ以上見てたらヤバかったしな……。

気を取り直して横座りすると、膝を床につけて足首を上へとあげる。と、股関節に引き攀れるような痛みが奔った。

「……い、痛たたたたたっ！」

沙里奈がやっている時は、簡単そうだったが、実際に自分で試してみると、股関節が硬いのか上手くできない。

「上げてないほうの足をもっと開いてみるとできるわ」

「こ、こうですか……」

「そう、ちよつと待ってね。手伝ってあげるから……」

沙里奈は背後に回りこむと、後ろから手を回して左手を掴んだ。そうして、ゆっくりと浩一郎の右足のほうへと持っていく。

「ほら、もう少しで手が届くわ、ほら、息をふーっと吐いて」

「ふ、ふ——っ」

あとわずか三センチほどで上げた右足のつま先を左手で掴めそうなのだが、そこが伸びない。

「はい、がんばって」

背後から浩一郎の体勢をバックアップするために、沙里奈が背中にくつと身体を押し

し付けた。

——ううっ……く、苦しい……けど、背中に沙里奈さんのおっぱいが……触れちゃつてるよ……。

柔らかな感触が背中をふにふにと撫でる。さつき目にしたあの豊かな膨らみが触れているのだと思うと、またも興奮を覚えて胸がどくりと高鳴った。

先ほどまでのレッスンで汗を掻いたせいも、甘く熟れた女らしい体臭が鼻をくすぐる。とくとくとという小さな鼓動に重ねて、薄生地を通して、沙里奈の温かな体温までもが伝わってくる。

「手を伸ばすんじゃないかって、もう少し足を上げたほうがいいかもしれないわね」

沙里奈は今度は浩一郎の前へと回りこむと、ひざまず跪いて浩一郎の足首を両手で掴んだ。わずかに十センチほどの先に、整った顔が現れてドキンとしてしまう。

——うわ……近すぎる！

上を向いた長い睫に縁取られた瞳の光彩は薄く、見ていると引きこまれそうだ。ほとんど化粧などしていないように見える肌はしっとりときめ細かく、いかにもすべすべとしている。

さらには、その下に視線をずらすとまた圧巻の風景があつた。深く開いた胸元から

みっちり詰まった谷間が覗いているのだ。

Dカップほどもあるだろうか。胸下までしか生地のないレススナ着のタンクトップは、胸をひとかたまりのようにして包み込んで、ぱんと張りつめていた。

ブラジャーをつけている様子はなく、少し身動きするたびにぶるんぶるんと誘うように揺れる。股間に再び熱い滾りを覚えてごくりと喉を鳴らす。

「ほら、ここの股関節をもっと立てるようにしたら楽になるから」

沙里奈が太ももにぴとりと手を置いた。突然に身体に触れられて、ビクンと身体が揺るいでしまう。

——わっ……や、やばい……。

沙里奈が太ももに置いた手を、そつと膝のほうへとずらした。指先がすつと肌の上を滑ってぞくりとした快感が背中<sup>へ</sup>に奔る。

「あっ！」

「あら、痛かったかしら？」

思わず声を漏らすと、沙里奈が心配そうに睫を揺らした。

「あっ……いえ……そういうんじゃないんで……大丈夫です……」

「ならいいけど……やっぱりまだ股関節が硬いのね。ここのところが解<sup>ほく</sup>れてくると、

どんなポーズでも取りやすくなるし、新陳代謝もよくなって脚がむくみにくくなるのよ」

沙里奈はほっそりとした指先で、再び膝から内ももをゆっくりと撫であげた。ぞわぞわとした感触に皮膚が粟立って、股間がきゅんと熱くなる。

——わ、ど、どうしよう……。

股間がごわりと硬くなったのがわかった。

必死にヨガポーズを取りながらも、股間に目をやると、困ったことにむくりと盛り上がってしまったっていた。柔らかな薄地のスエットパンツを穿いているせいでその膨らみは目立つ。まだ完全体とまでは行っていないからいいものの、これ以上、勃起してしまつては、沙里奈にバレてしまいかねない。

「……ここも、苦しそうね」

と、沙里奈がすつと股間へと手を伸ばした。予想外の刺激にビクンと身体が震えた。——ううっ……バ、バレてる!?

恥ずかしさに顔がかつと熱くなったのも束の間、沙里奈が触れたのは股間ではなく、スレスレの内筋だった。ただでさえ壊れそうに高鳴っている心臓がひときわズキンと鼓動して胸が苦しい。

——こ、こんな蛇の生殺しみたいなの……。

当然、沙里奈に他意などはないに違いないが、それにしてもまるで浩一郎を誘惑し、翻弄しているかのような指の動きに、ハラハラと鼓動が高まっていつてしまう。

「さ、沙里奈さん……このポーズ、キツいんで……あの……別のポーズじゃダメですか？」

「でも、このポーズが見栄えがいいのよ。ほら、猫背になってるわ。胸をちゃんともつと張ってごらんさい」

沙里奈はぐいと身体を前に倒して腕を伸ばすと、今度は浩一郎の胸板に触れた。指先がさつと乳首に擦れてむず痒いような快感が奔った。

「ほら、そう。胸をちゃんと張って……いいわ。胸筋がきちんと伸びてるのがわかる。うん、そのまま、もつと胸を突き出して……」

綺麗に手入れのされた指先でさわさわと胸の辺りを弄られるたびに、下腹部がジンジンと痺れていく。時折、まるでひつかくように乳頭に爪が触れ、その甘い愉悦に声が漏れそうにさえもなってしまう。

「そう、いいわ。そのまま……そのままよ……リンパの流れを整えるから……」

沙里奈は右手で浩一郎の胸板を撫でながら。左手を再び下腹部に戻した。そうして、

太ももの股内に手を置くと、円を描くかのようにゆつくりと指先で揉み上げる。

「あぁっ……」

「うふふ、リンパを解すと、気持ちがいいでしょう?」

思わずため息を漏らすと沙里奈がくすりと笑った。その妖しげな微笑にぞくりと背筋がおののいてしまう。

「あら……気持ちよすぎて、ココがこんなになっちゃってる」

「あっ!」

沙里奈の手が屹立きつりつにさつと触れた。たった一瞬のことだったが、電流に打たれたかのような甘い愉悅きげんがビリビリと身体を撃った。

「乳首も、こんななものね……」

「はっ……はうっ……」

薄いペーシユのマニキュアを塗られた爪先が、左の乳先の小さな突起をきゅつと掴みあげた。今度こそ誤魔化しようのない喘ぎ声が漏れて恥ずかしさに頭がくらくらしてくる。

——さ、沙里奈さん、どういふつもりなんだ……。

まるで挑発するかのような沙里奈の態度に、悶々とした興奮が渦巻いてたまらない。

「うふふ、こんなになってるんじゃ、写真、撮れないじゃない……仕方がないわね」  
今度こそ、沙里奈ははつきりとペニスに触れた。

まっすぐに揃えた四本の指で根本からすーっと撫であげ、亀頭まで行き着くと、今度は指先を折り曲げて筒にした手で根本まで擦り下げる。

根本まで行き着くと、今度はさつきよりも握りの力を強めてまた亀頭へと這い上がってきた。カリ首の辺りを通りすぎる瞬間に、素早く手首をスナップするかのような捻りまで加えられ、腰が勝手にふるりと震える。

「あっ……あぁっ……さ、沙里奈さん、そんなことされたら……」

屹立を左手で弄くりながらも、右手では左乳首をくりくりと摘む。

沙里奈の、愛撫としかいいようのない淫らな手の動きに、頭がぼーっとして、ただただされるがままになっていることしかできない。

ペニスに指先が往復するたびに、熱が高まっていく。精液を奥から誘い出すかのようなその動きに腰が浮き、睾丸がぐぐくと硬くなったのがわかった。

——や、やばいよ……こんなんじゃ……イっちゃう……。

オナニーの経験くらいはあるといっても、女性に触れられたことは一度もなかったウブなペニスにとっては、ズボン越しの刺激であっても十分すぎる強さだった。



ひと目あった時に、我を忘れて見惚れてしまったほどの美貌と色香をあわせ持つ女性に、身体中をいのように弄られているという事実に加え、年上女性ならではの巧緻なテクニクに射精欲はひたすらに募っていく。

「ああっ……き、気持ちよくなって……ぼく……」

——ううっ……もう……これ以上我慢できない……。

このままいっそ、射精してしまいたいという欲望と、パンツの上から擦られて達してしまつては恥ずかしいという男としての矜持とがせめぎあう。

「ゆ、許してください、沙里奈さん……」

乳頭で弾ける快感と、腰奥の疼きが限界を迎えるのを感じて許しを乞うと、沙里奈は浩一郎の顔を悪戯っぽい顔で見上げながら、股間の手を太ももへとずらし、そうして、ゆつくりと膝を折って突き上げた足首へとなぞっていった。

そろりそろりと這い上がっていく手のひらの感触に、必死に声を出すのを耐えていると、やがて、沙里奈の手は浩一郎の足首へと到達した。そうして、優しく足首に指を回すと、そのまま、ゆつくりと床へと戻した。

「はっ……はあああ……」

横座りの体勢に戻った瞬間に、股間の強張りの一点を抜かして身体中の力が抜けた。

頭の後ろに回す形で上げていた左手を脇に下ろすと大きく息を吐く。

「まだダメよ……チルアウトしないとね……」

緊張が解けた浩一郎の肩に手を置くと、沙里奈はぐっと力を込めた。

押し倒される形でヨガマットの上に倒れると、沙里奈は浩一郎の腰の上に跨がってぐっと上半身を押し付ける。

胸がぐっと押しつぶされて、ふにゆりと上乳がタンクトップからはみ出した。股間がぐっと力を持って、沙里奈の柔らかな太ももにめり込む。

「あの……チルアウトって……」

「身体の力を抜いて……リラククスして頂戴」

沙里奈は浩一郎の頬を両手で包むと、頬骨の辺りにそっと唇をつけた。ふわりとした唇のこそばゆい快感に身体がむずずと震える。

そのまま沙里奈は唇を横にずらすと、ちゅっちゅつと口づけながら、ゆっくりと耳元へと移動させていく。やがて耳へと到達すると、浩一郎に覆いかぶさるようにして囁いた。

「ねえ、わたし、本当に君には感謝してるのよ。だって、勇気を出して、うちのヨガクラブに来てくれたんだもの」

「そ、そんな……勇氣だなんて……本当にたまたまタイミングが合ったというか……」  
「それにね。最初の男性会員がこんな可愛い男のコで、すごく嬉しいわ……だからお礼に……手でしてあげる」

ふーっと熱く湿った息が耳奥に吹き込まれた。

ぞわりと身震いする浩一郎の右頬に手のひらが当てられたかと思うと、そのまま首筋から鎖骨をなぞり、胸板を降りていく。

「お、お礼なんて……そんな……からかうのは止めてください」

「からかってなんてないわ。それとも君はこういうの、嫌い？」

「んっ……あっ……」

耳朶が優しく甘噛みされた。かすかな痛みとともにジンと甘い愉悦が耳裏に生まれ  
た。

「な……なんでこんなこと……するんですか……」

「うふふ。こういうのが好きな女もいるのよ。男のコの気持ちいい顔を見ることが……ね、浩一郎くんは、すごく敏感な身体をしているのね。こうして、耳元を舐めたりとか……さつきだつて乳首を触ったら声をあげちゃっていたし……」

「び、敏感とか……僕、自分ではよくわからないんですが……ああっ！」

「ほら、また声を出した。ねえ、君がエッチな身体を持つてること……わたしがたっぷり教えてあげる」

耳穴にぬるりと熱い舌が這入り込んできた。

ぴちゃぴちゃという水音が脳内で直接に響いて催淫する。耳の上部や耳朶を軽く啜えられて息をかけられると、すつと微風が通りすぎてさらに情欲を煽られた。

——み、耳ってこんなに敏感だったんだ……。

普段、耳を意識することなど、よほどに寒い時と耳搔きをする時くらいだ。今まで知らずにいた性感帯に新鮮な驚きを覚えてしまう。

唇と舌とで顔や耳や首元を愛撫されながら、左手では身体を優しく撫でられていると、身体中が快楽に満たされていくのがわかった。

「あ……あぁっ……あぁっ……」

「いいのよ、そう、もっと声を出して、君の感じてる姿、たっぷり見せて……」

情欲をくすぐるようなやや低音の囁きが心地いい。沙里奈の精緻な愛撫にうっとりとして身体が蕩ける思いだが、しかし、これではあまりに情けない。

——まるで僕のほうが女のこみみたいだ……。

気持ちよくしてもらえるのは嬉しいが、沙里奈の身体に触れたいという思いが強く

あった。

——触っても……怒られないよな……。

ヨガ教室といえども一応は『先生』であるし、何よりも八歳年上といえれば十分に大人だ。そんな大人の女性と、今まで話したことなどほとんどない。それが、こんなことになってしまっただなんて……。

リードに任せただけがいいのか、それとも、自らも積極的にいっていいのか……。悶々と悩む浩一郎の身体にびったりとくっつけられている沙里奈の身体は、戸惑いを超えて躊躇の籬を外すに十分なほどに魅惑的だった。

——ダメだ、やっぱり我慢できないっ！

上半身を倒したまま手を伸ばすと、腰に跨がった体勢の沙里奈の尻に触れた。

インナーマッスルを感じさせると、腰に張り出した尻を手のひらで抱え込むと、ぷりぷりとした弾力に満ちていた。少し力を入れて指先を食い込ませると、まるでもぎたてのマスカットのようにぷりんと弾き返してくる。

ゆっくりと円を描くように擦ったり、手のひら全体でやわやわと揉んでいると、やがて手にしつとりと馴染んでくるようだ。

「んっ……浩一郎くんだったら……若いのにずいぶんとエッチな触り方するのね」

「いや……あの……だつて、沙里奈さんのお尻の感触が気持ちよくなって……好きに触つてたら、自然とこんな触り方になってしまったんです……すみません……」

「謝らなくてもいいのよ……だつて、気持ちいいわ」

その言葉は本当らしく、沙里奈は膝をヨガマットの上についてつんとヒップを突き上げると、まるでオネダリするかのように左右にくねらせた。

——き、気持ちいいって……言ってくれてる……！

単純なもので急に勇氣のようなものが湧いてきた。それならば、と左手は尻に置いたまま、沙里奈に倣つてもう片方の手をウエストへと滑らせる。

しなやかに鍛えられた筋肉が、バランスよくついた沙里奈の身体が描く曲線は、見事の一言だった。きゅつと括れたウエストにぺたんこの腹、うっすらと腹筋の割れた腹部を指先でなぞると、沙里奈が甘い吐息を漏らした。

少しだけくすぐったがっているかのような鼻にかかった甘い声にズキズキと股間が鼓動する。

そのまま胸丈のタンクトップに包まれた胸を下から掬い上げると、手のひらにずつしりとした量感が伝わってきた。それでいて、ふわふわと心もとないほどに柔らかいことに驚いてしまう。

きゅつと指先を食い込ませるとくねりとひしゃげ、柔らかな乳肉が指の間からふつつとはみ出す。手のひらの中で自在に形を変える乳房を揉み込んでみると、やがてその中心部がぼちりと硬くなってきたのがタンクトップ越しにわかった。

——ひよ、ひよつとして……これってノーブラ？

タンクトップの裾に指を掛けるとそのまま上へとずりあげる。すると、ぶるんと揺れながらも豊満な膨らみがふたつ、まろびでた。

「はあ……すごい……これが……沙里奈さんのおっぱい……」

初めて目にする女性のシンボルは想像していた以上に美しかった。

ふたつに割ったグレープフルーツをつけたようにまん丸で、その先端には小指の先ほどの大きさの乳頭があり、そのまわりをぐるりと乳輪が覆っている。色合いは淡いベージュで真っ白いバストにアクセントを与えるようにぼちりと浮き上がっている。

「うふふ、そんなに目をまんまるにして」

そういう沙里奈の声も、いつもより少しだけ興奮に上ずって聞こえた。

「だって……僕、女の人のおっぱいを生で見たのなんて……初めてですから」

「あら、そうなの？　じゃあ、童貞なのね」

「は……はい……」

未経験ということがバレては恥ずかしいと思う気持ちもあったが、自然と素直になれたのは、沙里奈が年上のせいだったかもしれない。自分と同じ年だというのに経験豊富だというのならば、失敗したら困るだとか、おかしなことをしてしまつたら恥ずかしいだとか考えて、気が引けてしまうが、大人の女性ならば、何をしてても笑つて許してくれる気がした。

「初めてがわたしなんて嬉しいわ。わたしが君に、新しい経験を与えてあげられるのね」

やはり沙里奈は優しかった。大きな目をすつと細めて微笑むと、浩一郎の頭をきゅつと抱き寄せてくれた。

——う、うわっ！ ……すごい光景だっ！

目の前の視界が乳房でいっぱいになった。

ただでさえ普通以上に豊かだというのに、沙里奈が上半身を下に向けているせいで、さらにそのボリユームが強調されていた。すべすべと滑らかな肌はまるで極上のホイップクリームのようなキメの細かさで、沙里奈が息をするたびに、ふるふると揺れる様が悩ましい。

「さ、触ってもいいですか？」



「やあね。さっきまで触ってたのに、今更そんなことを聞くの？」

ごくりと生唾を飲み下して尋ねると、沙里奈は熱っぽい声色でくすりと笑った。

「い、いや……なんだか……緊張しちゃって……」

「いいのよ、君の好きなようにしなさい」

「は……はい……」

そろそろと手を伸ばすと、下から掬い上げるように手を当てた。

かすかに汗ばんだしっとりとした肌が手のひらにびったりと吸い付くようだ。先ほどの生地越しとは違い、温かさがダイレクトに伝わってくる。

——こ、これがナマのおっぱいの感触なんだ……。

同じ「胸」というパーツだというのに、自分とはまるで違う。なぜこんなにふにふにと柔らかくて、魅惑的に膨らんでいるのかが不思議で仕方がない。

「うふふ。なんて顔して触ってるの。可愛い」

沙里奈は優しく微笑むと、必死に胸を揉み込んでいる浩一郎の頬に手をびとりと当て、素早く唇を近づけた。

ふわつとした物体が唇に一瞬押し付けられて、すぐに離れる。静電気が奔ったかのように唇がひりつと痺れて、その後、じんと甘い感激が湧いてくる。

——うわっ！ キス……されちゃった……。

むろん浩一郎にとつては初めてのキスだ。

——唇って……なんて柔らかいんだろう……。

感動に打ち震えていると、沙里奈が再び顔を近づけた。そうして互いの吐息がかかりあうほどに接近すると、上目遣いで見上げてふつと微笑む。

「本当は……手で出すだけって思ったけど……なんだか気分が乗ってきちゃったわ」

沙里奈はゆつくりと顔を近づけると、再び口づけてくれた。柔らかな唇がとん、とぶつかり合う。

今度はさっきのように離れることはなかった。

唇同士を密着させていると、かすかに開かれた沙里奈の唇の間からにゅるりと舌が這入り込んできた。甘い唾液が流れ込んできて、媚薬のように頭を痺れさせていく。

「んっ……ちゅっ」

沙里奈の舌は、浩一郎の口内を奔放に動いた。菌茎の端から端までをヌメヌメと行き渡ったかと思うと、今度は上あごをレロリと舐めあげる。

——ああ、気持ちいい……。

蕩けそうな思いというのはこういう気分のことだろうか。先ほど身体を触られた時

とはまた違った快感だった。沙里奈に心から受け入れられたかのように、満ち満ちた気持ちに幸せでじんと心が震える。

生温かくとろりとした舌を味わいながら、剥き出しになったバストに手を這わせる。さつきよりも手の馴染みがいい気がしたのは、口づけを交わしたことによって沙里奈との心理的な距離が近づいたせいだろうか。

「んっ……はぁ……んんっ……」

ふにふにと揉み込んでいると、唇を合わせている沙里奈の息が荒くなってきた。体温も少し上がってきたようだ。

「んっ……」

斜め下から乳房を掬い上げながら、親指と人差し指とで乳首を摘むと、みるみるうちに硬度を増してピンと突き立ってしまった。

「すごい、こんなにこりこりになってる……」

ぽってりと充血した乳首は、さつきよりも赤みが増して赤褐色へと変化していた。自らの手の中で変化する女体に歓びを覚えながら、ダイヤルを捻るように左右に転がすと、沙里奈の身体がびくと震えた。

「あぁ……沙里奈さんの身体もすぐエッチだ……」

「んっ……だつて大人だもの……」

照れ笑いを浮かべる沙里奈の両乳首を軽く引つ張ると一気に離れた。すると、ぶるんぶるんつと乳房が揺れる。誘うようなサウンドに我慢しきれずにがっしり驚拵むと、感度抜群の乳頭をめがけて舌を突き出し、舌先でつんと突いた。

「あはうんっ……」

艶っぽく色づいた果実は唇に含んでもまた美味だった。程よくこりつとした舌触りが心地よく、ほのかにミルクのような甘さがある。

ちゅぷっ、ちゅぱっ、ちゅぼっ。飴玉を転がすように舐めていると、一層硬さを増した。

「はぁ……んっ……」

悩ましい声を漏らしながらも、沙里奈は浩一郎の股間に手を伸ばした。そうして、振り返ったペニスの根本に指先を当てると、つーっとなぞりあげる。

「んっ……」

「うふふ、おちんちんが熱あっつーくなってるわ。それにズボンの中で苦しそう」

沙里奈は怪しげな笑みを浮かべると、上半身を起こした。そうして、腰から太ももへ位置をずらし、浩一郎のスエットパンツのウエストへと手をかけた。

「ね、脱いだほうが楽よ」

するするっとスエットを太ももまで下ろすと、ボクサーパンツだけになってしまった。さらにはパンツのウエストゴムへと手をかけると、降りして脚から抜き取る。

「ほら、これで楽になったわ……ね。おちんちん弄られるの、好きでしょ？」

「は……はい……」

「素直でいいコ。じゃあ、触ってあげるわ……」

沙里奈は再び浩一郎の太ももの上に腰を下ろすと、上から覗き込むように股間に視線を落とした。

——うっ……は、恥ずかしい……。

胸こそはだけているとはいえ、衣服を身につけたままの沙里奈に比べ、浩一郎は逆には上はTシャツこそ身につけているものの、下半身は裸だ。しかも、天井にはレッスン時と同じく照明が煌々と輝いている。

腹筋に力を込めて下腹部を確認すると、立派に屹立してしまっているのだ。赤らんでテラテラと光る剛直が目に入って、恥ずかしさに四肢にぎゅっと力がこもる。

「わあ、こんなに熱い」

沙里奈はペニスの根本を左手で支えようと、右手で亀頭をふわりと包み込んだ。そう

してくりくりと、転がすように手首をスナップさせては捏ねる。

「くうっ……」

直接に触れられるのは、やはり服の上からとはまるで違う。

粘膜に触れる手のひらは温かくぴったりと密着して、下腹部にぞわぞわとした快感を巻き起こす。

——や……ばい……女の人の手が……こんなに気持ちがいいだなんて……。

自分で擦ると、ただ射精に向かつて一直線に向かつていくだけだ。しかし、年上の女性の指で弄ばれるのは、優雅な遊戯のようだった。

射精に導くのではなく、もっと上の快感を呼び起こすかのような妖しい指使いに腰奥がうずうずと疼いてしまう。

「あらあ、もうカウパーが出ちゃってるのね、手のひらがこんなにぬるぬる。でもちようどいいわ。そっちのが気持ちいいでしょう？」

「あっ……あぁっ……」

沙里奈の手のひらを汚してしまった恥ずかしさに、顔がかぁつと熱くなる。

「恥ずかしいんでしょう？ わかるわ。だってこんなふうに一方的に身体を弄られて、恥ずかしくないわけはないわよね」

「ううっ……も、もう一度、おっぱいを触らせてくださいっ」

「ダメ。今は君だけが一方的に気持ちよくなる時間なの……おとなしくしていなさい？」

沙里奈は優しい口調ながらも、きつぱりと浩一郎の要求を退けると、右手で男根を弄りながら、左手でTシャツの裾をめくりあげた。

「んっ……あぁっ……んんっ」

竿を優しく手で上下にしごかれて、腰奥が疼く。同時に、触れるか触れないかのタッチの指先が脇腹や胸部をくすぐり、全身を刺激する。

「そう……もつと声を出して。男のコだって、本当は全身に性感帯があるのよ。もつと身体の声に素直になりなさい」

低く囁くような声が心地いい。すべてを許してくれているかのような優しい声色に、うっとり夢見心地に浸ってしまう。

「そう、身体力が抜けたわね。いいコ……でも、おちんちんはこんなにカチカチのままよ……それに後から後からカウパーが溢れてくる。濡れやすいのね」

「あぁっ……」

「もつとお漏らししてもいいのよ」

亀頭の上をつるつると滑っていた手のひらが、カリ首をきゅつと掴んだ。

そのままつーつと降ろされ、またそろそろと先端に向けて昇っていく。同時にもう片方の手の爪先は、さわさわと腹部を撫であげて性感を掻き立てる。

「うふふ、睾丸がこんなにぎゅつて縮こまって……精子がおちんちんに流れ込んでるのね」

まるで射精を誘導するかのようになり、上下する手の刺激を求めて腰がぐつと浮いてしまふ。ただ握っているだけではなく、それぞれの指をくねくねさせて絡みつかせるように動かす手つきが淫靡だ。

「あらあ、タママもこんなにカッチカチよ」

沙里奈は脇腹を撫でていた手をじつとりと這わせて睾丸へと移動させた。

毛の流れに逆らうようにさわさわつと指先でくすぐられると、精子タンクの中の精液がぞわぞわと蠢いた。

「あ……あ……あ……あ……」

「そう、もっと切ない声を聞かせて……君みたいな可愛い男のこの、そういう声を聞くと、ゾクゾクして興奮しちゃう」

沙里奈が股間を浩一郎の太ももへと擦りつけた。そこはヨガパンツ越しにも熱く火



照っているのがわかった。

「うっ……沙里奈さん、あんまり意地悪しないでください。僕……」

「ダメよ、まだまだ硬くなるわ……もう一段階、上までいらっしやい」

指先に翻弄されて懇願する浩一郎のペニスを、沙里奈がしゆるしゆるとシゴきあげた。

指先に合わせて精液がぐつと上昇したが、爆発寸前で亀頭をぐつと掴まれて精道をふさがれては行き場がない。

「ああっ……ああああっ……すぐっ……すぐすぎますっ……」

シコシコシコ、とペニスを握った手を上下されるたびに愉悦が高まっていく。ジリジリと焼け付くような焦燥と、今すぐにでも性栓を開放し、射精してしまいたいという欲求。

「沙里奈さん……沙里奈さんっ……」

「どうしたの？ 何が欲しいの……」

「おっぱい……沙里奈さんのおっぱいに触りたいんですっ！」

「もう、仕方ないわね……いいわ、触りなさい」

沙里奈の身体に触れられないのがもどかしく、ダメだと言い含められているものの、

我慢できずに必死に手を伸ばすと、沙里奈はやや身体を前に傾けて胸を差し出してくれた。

「あぁっ……おっぱい……沙里奈さんのおっぱい、柔らかい……」

気持ちよすぎる手コキに意識を遣られそうになりながら、必死に両手で胸を揉みしただく。手のひらの中でぐにやぐにやと形を変える乳房に夢中になっていると、パンツと頭の奥で何かが弾けるのがわかった。

「あっ……あぁあぁっ……」

途端にどくんつとペニスが脈打った。次の瞬間、先っぽからどろりと熱い液体が噴出してこぼれた。股間を強烈な快感が襲い、四肢がジンジンと痺れる。

「あら、すごい、まだドクドクいつてる。どれだけ出るのかしら」

沙里奈は射精に達しても、その手を止めようとしなかった。それどころか、精液をローション代わりにしてさらにペニスをしごき立てるのだからたまらない。

「あっ……ううっ……うひゃあぁっ……」

最初はくすぐったくてたまらずに身を振って逃れようとしたが、鍛えられた沙里奈の太ももで腰をがっちりと掴まれているためにそれもかなわない。

そのうち、愉悦の残滓がだんだんと輪郭を持ち始め、むず痒さに勝って新しい劣情

がこみ上げてきた。

「ほら……ね、君のおちんちん、また勃起してきちゃったわ。さすが若いだけあって、元氣なのね」

「う……あぁっ……」

こんなことは初めてだ。数分前に射精したばかりだというのに信じられない。が、現実、下半身は自分でもはつきりとわかるほどに、二度目の剛直をしてしまっている。「でも、嫌いじゃないわ、こういう元氣なおちんちん。ねえ、もう一回、搾り取ってあげる」

沙里奈はその場に立ち上がると、ヨガパンツを脱いだ。そうしてスポーティーなシヨーツをも脱ぎ払うと、四股しこを踏む要領でゆつくりと浩一郎の腰上へと跨がってきた。——う、うわぁ……おま○こが……丸見えだ。

上から徐々に近づいてくる女性器は、今まで見た何とも違った姿形だと思った。

一番外側をぽつてりとした肌色の肉畝が囲っていて、その内側にやや褐色がかかったフリルがある。身体の正面側には柔らかかそうな和毛がふわりと茂り、その中間につやつやと突き立った小さなピンク色の肉粒が見えた。

——こ、これが女の人の……おま○こなんだ……。

グロテスクといえればグロテスクだが、目を離すことのできない何かがあった。

沙里奈のような綺麗な女性に、こういったものが隠されているだなんて。まるで見てはいけないものを見てしまったようで胸がドクドクと高鳴る。

「ふわあああ……」

感激のため息を漏らす浩一郎の亀頭が膣口にとん、とぶつかつた。

「うふふ、これから君のちんぽがわたしのおま〇こに入っていくの。ちゃんと見ててね」

沙里奈は腰を沈めるのを一旦止めると、V字にした指先で小陰唇をぱっくりと開いた。

——う……わあ……。

ベールを開いた奥には、鮮やかな薔薇色の粘膜が咲き誇っていた。まるで雨上がりの花弁のように、つやつやと濡れて光っている。

「ほら、ゆっくり入っていくから……ね」

股をぱっくりと開いたままの中腰という姿勢を、苦もなくすることができるのは、ヨガで鍛えた肢体の持ち主の沙里奈ならではの。

片手は小陰唇、そしてもう片方の手を浩一郎の屹立の根本にそっと添えると、沙里

奈はゆっくりと腰を沈めた。

「あっ……あああっ……」

ぬぷりと亀頭の先の一センチほどがぐぐつと粘膜に沈み込んだ。包み込まれた部分に温かで濡れた感触が広がる。

「うふふ、ほら、君のおちんちんがわたしのおま〇こに突き刺さってる」

沙里奈は亀頭までぱくりと咥え込んだ状態で腰を止めた。

ぬめりと濡れた粘膜にねつとりと包み込まれた上に、亀頭首が膣口できゅつと締め付けられる。

——う……ううっ……こ、これが女の人の中なんだ！

まだ半分も入っていないとはいえず、十分に沙里奈の膣の具合は感じられた。

想像していたよりも、そこはずつと熱かった。薄く敏感なカリの表皮越しに、血液のどくどくした滾りを感じられた。這入り込んできた異物に驚いたのか、膣壁の粒壁が騒いで亀頭をさわさわとくすぐる。

「ううっ……も、もつと……もつと奥まで……挿れてください」

「うふふ、ダメよ。ゆっくり、ゆっくり、スケベなこと、楽しんでみましょう」

生殺しの快感に、もつと奥まで差し込んで欲しいと腰奥が切なく疼く。懇願を口に

する浩一郎に、沙里奈は淫靡な笑みを浮かべたまま、円を描くように腰を振った。

——ああっ……気持ちいい……けど……けど。

はたしてこれは童貞喪失といつていいのか、それとも、まだなのか。

なぜこんな切羽詰まった状況でそんな思いが浮かぶのかわからないが、けれども、今更ながらに、これから初めてのセックスをするのだという実感が湧いてきて、背筋がゾクゾクとする。

「ねえ、わたしのおま○こはどう？」

「ああっ……濡れてて……温かくて……気持ちがいいです……」

「そうでしょう？　これが女のアソコなのよ。これからもっと気持ちよくしてあげる……けど、ちょっとだけ我慢しなさい」

沙里奈が腰をわずかに上に引くと、じつとりと濡れた亀頭が顔を出した。

このままでは抜けてしまう。追いかけるように腰を必死に突き上げたが、沙里奈はさらに腰を引く。亀頭が膣粘膜に擦れる快感と、沙里奈にずっぽりと包まれないという衝動とに、身体がバラバラになりそうだ。

「ほら、もう一度見て、君のがわたしの中に入っていくところ」

亀頭が抜けきるわずか手前で沙里奈は腰を止めると、またも沈めてきた。

四股でも踏むかのようながに股に開いた体勢で、両膝に手を置き、まるでナメクジが這うくらいのスローなペースで腰を落としてくる。

「あ……あっ……あうっ……」

焦らしに焦らされた上の挿入に、声をあげずにはいられなかった。

渴望した膣内へとみちみちとめり込んでいくたびに、うっとりとするような悦愉が下腹部を襲う。

赤黒い肉竿が沙里奈に這入り込むたびに、その膣口から液体が押し出されてじゅぼじゅぼと溢れてくる。肉竿をコーティングするようにとろとろと垂れる愛液のお陰で、滑りが増して一層の快感がこみ上げてくる。

「ほーら、君のおちんぼ、奥までずっぽり飲み込まれちゃった」

ついに浩一郎のペニスが、沙里奈の膣に根本まで埋まった。

——す、すごい、世の中に……こんな気持ちがいいことがあるだなんて……。

ついに大人になったのだ。女の身体を知った喜びに、じんとした感激が腰奥にこみ上げてくる。

「ねえ、君、初めておちんちんが女の中に入ったのって、どんな感じ？」

「ううっ……ぬるぬるして……ぐぐって締め付けてきて……すごい……」

「こうして動かすと、もつとぬるぬるしてくるのよ」

沙里奈がスクワットの要領で腰を浮かせた。真っ赤に怒張したペニス、じゅぶじゅぶと淫らな音を立てながら、膣から抜けていく。

「あっ……ぐあっ、ぐうっ……！」

亀頭のクビレを膣口が通りすぎようとした瞬間に、きゅつと絞られた。ずきんとした快感が腰奥に響き、押し出されるようにカウパーが漏れた。

「い、今、何を……」

「うふふ、気持ちよかった？」

「うふふ、気持ちよかった。ペニスをきゅつと締め付けたまま、沙里奈が腰を下ろすと膣壁の粒が陰茎表皮をコリコリと刺激する。」

「す、すごい……女の人のアソコって……こんなに締まるだなんて……」

「うふふ、ヨガでインナーマッスルを鍛えてるうちに、膣トレもできちゃったみたいね。ね、こういうのはどうかしら？」

沙里奈は一旦根本まで浩一郎のペニスを飲み込ませると、ゆっくりと腰を引き上げていく。徐々に露わになっていく陰茎は、沙里奈の愛液でぬらぬらとてかり、ぷんと甘酸っぱい体液の匂いが立ち込めていく。



カリ首のクビレに膣口がたどり着くと、ぎゅっと握り締めるかのように亀頭が締め付けられた。ギチギチとした締め付けはそのまま、すぼんつ、とシャンパンの栓を抜くかのように膣口で亀頭を抜き抜く。

「あぁっ……」

弾けるような快感が、亀頭のクビレから鈴口に向かって駆け抜けていった。

小爆弾のような愉悅が下腹部で爆ぜた次の瞬間、沙里奈の中から抜け出てしまったペニスが切なさに疼く。

「あ……あ……沙里奈さん……」

一刻も早く沙里奈の膣内で抱きしめて欲しい。

身震いするペニスに我慢しきれずに呻くと、沙里奈は指先を屹立に伸ばした。そうして、まるでいい子いい子するかのように鈴口周りを優しく撫でる。

「うふふ、おちんちんが寂しいのね。大丈夫、そんな顔しないの。すぐに中に入れてあげるから安心なさい」

丸めた手のひらで鈴口を撫でられるたびに、下を向いた指先が亀頭の段にさっと触れる。むず痒い快感に、まるでお漏らしのようにカウパー液がじわじわとこぼれてしまう。

「あつ……早く……早く入れてくださいっ!!!」

一度女性の胎内の感覚を知ってしまったせいだろうか。

さつきまでとはまるで違った切実さが身体中を支配していて、乞うことへの恥などどこかへと消え去ってしまったようだ。

「うふふ、焦らないの。時間はたっぷりあるんだから……ね?」

沙里奈は母性と淫性とを共にたっぷりと湛えた笑みを浮かべ、再び腰を沈めてきた。みちみちつと媚肉の詰まった膣道を掻き開きながらペニスがゆっくりと女陰に埋まっ  
ていく。

「あつ……あああつ……ひゃあつ……」

とろとろと蕩けそうな蜜をたっぷりとまとった肉壺にたっぷりと浸かりきると、安心感に四肢の力が抜けた。が、それも束の間のこと。

——ううっ……もつと……もつと気持ちよくなりた……。

さらなる焦燥が腰奥に生まれた。どこまでも貪欲にエスカレートしていく淫望に、自分自身がどうなってしまうのだろうかとうとふと不安が浮かんでくる。

「うふふ、焦らしすぎちゃったかしら。ごめんね。君が可愛いすぎるのが悪いのよ」

沙里奈は浩一郎の腰上にぺたりとお尻を下ろすと、そのまま上半身を前に傾けてキ

スをした。そうして口づけを交わしながらも、前後へとスライドさせて腰を使ってくる。

「はあ……君のおちんちん、すごくいいおちんちんね。わたしの気持ちいいところに当たるといい」

沙里奈が顔を上げると、その額にうっすらと汗が滲んでいるのがわかった。

半開きになった唇からピンク色の舌が覗いて、まるで喉でも渴いているかのように唇をれろりと舐めあげる。

いつも澁刺としたヨガイinstrakターの女らしい悩ましげな表情に股間がずきんと疼いた。

「さ、沙里奈さんのココも……すごくすごく気持ちよくなって……ありがとうございませうっ！」

「お礼なんて言わなくていいのよ。わたしが君としたかったんだから……」

沙里奈はもう一度、顔を近づけると、浩一郎の唇を奪った。ぬるりとした舌と温かな唾液が口内をうっつとりと満たす。

「あぁ……んんっ……んちゅっ……」

緩く解かれた唇から漏れる吐息に交じる、ぴちゃぴちゃと響く唾液と愛液の音が淫

欲を掻き立てる。密着した互いの上半身に汗が浮かんで、さらにぴったりと肌が張り付いていく。

「はあ……んっ……い、イキそう……」

沙里奈は苦しげな息を漏らすと、身体を起こした。そうして、背筋をピンと伸ばすと、上気してぽつと赤く染まった乳房が目の前でぷるんつとバウンドした。

「イってください、沙里奈さんっ！ 僕、女の人がイクところ……見てみたいんですっ！」

「やあね。エッチなんだからあ……」

「そうです！ 僕、沙里奈さんにエッチに目覚めさせられちゃったんですっ！」

ふるふると揺れる沙里奈のバストに手を伸ばすと、全体を手のひらでぎゅつと包み込んだ。親指と人差し指とを先端の蕾に当てるときゅつと捻る。

「ああんっ！」

快感のスイッチを入れられたかのように、沙里奈が背筋をびくんと震わせた。膣がきゅつと締まり、奥から熱い液体が流れ出たのが亀頭の先に感じられた。

——沙里奈さん、感じてくれて……！

嬉しさに再び乳頭を捻ると、残った三本の指でぷにぷにと乳肉を揉みしだく。



解れてさつきよりも柔らかくなった乳房に比べて乳首はコリコリとしこつていた。じつとりと汗ばんだ肌に、手のひらがぴたりと吸い付いてまるで溶け込んでしまいうだ。

「沙里奈さん、沙里奈さんの身体、すごく熱くなってる……」

「ああんっ……ああ……奥、奥の気持ちいいところに、君のおちんぽが当たるのお……」

ピストンをくり返すうち、膣壁と陰茎が摩擦して、透明な愛液がうっすらと泡立ち始めた。ジョリジョリと擦れあう陰毛はしつとりと濡れ、太ももまでもがずぶ濡れだ。「さ、沙里奈さんっ！ ぼ、僕も……そんなことされたらイっちゃいますっ！」

「イ、イキましょう、一緒にっ……」

腰をねつとりと回しながら、亀頭で膣奥をぐりぐりと刺激して悦びの声をあげる、淫らすぎるヨガインストラクターの痴態に耐えきれずに泣き言を漏らすと、沙里奈は床に膝をつけて身体をぐつと反らせた。すると、少し隙間の開いた交接部から、自分のペニスが沙里奈の中に入入りしているところが、ばっちり目に入った。ぬらりとした淫猥な小陰唇の裂け目に、赤黒く怒張した屹立がめり込んでいるエロティックな眺めが、本能をずきんと刺激する。

「あぁっ。すごい……僕のちんちんが……沙里奈さんの中に出たり入ったりしてる……」

「そうよ……そのせいで、わたし、どんどんおかしくなっちゃうの……あぁっ……イ、イクッ！」

身体を大きく弾ませて腰を上下していた沙里奈が背筋をビクンッ！と大きく震わせると、膣内がぐぐぐと内側に引きこむように蠕動ぜんどうした。ついに達したのだ。

——こ、これが女の人がイった瞬間なんだ……。

目を軽く閉じたその表情には恍惚が浮かんでいた。半開きになった唇からつーつと涎の糸が一筋垂れる。

——な、なんて綺麗なんだろう。

風呂上がりのように上気した肌は、ほんのりと赤く染まり、エクスタシーに襲われてぶるぶると小刻みに震えている姿は、神々しさと、腕で包んであげたいという健気さとを兼ね備えて見えた。

「あぁ……あぁあ」

が、浩一郎のほうも冷静さを保ち続けていられる状況ではなかった。

アクメに達した牝穴の、複雑に折り重なった褻が、精液を求めてざわざわと蠢いて

屹立を絞り立てる。

さつきまでの意識しての狭窄とはまた違う、自然な腔収縮だった。が、無意識ゆえのランダムなその動きに、かあつと下腹部が灼熱したその次の瞬間、沙里奈の子宮へとまっすぐに導かれるように、辜丸からの精液が精道を駆け抜けた。

「あああああつ！」

凄まじいほどの快感が腰奥で沸騰し、全身へと広がっていく。栓の壊れた蛇口から迸るかのように鈴口から精液が溢れて沙里奈の腔内へと流れ込んだ。

先ほど一度、手でイカされたばかりだというのに、信じられないほどの大量の精液が噴出しているのがわかった。これがセックスでの射精なのだ。オナニーの後に襲ってくるむなしさの代わりに、満ち満ちた満足感が四肢を駆け巡る。

——どうしよう、世の中に……こんな気持ちいいことがあるだなんて……。

セックスを知った新しい自分。この新鮮な気持ちに似たような昂<sup>たかぶ</sup>りをつい最近、感じたことがある。

そう考えてふと思い当たった——この教室に通い始めて、感じた気持ちと少し似ているのだ。

——なんだか、新しいことばかりだ！



大学に入学して三年。この頃は授業もマンネリだし、特に趣味もない浩一郎にとっては、新しい刺激を感じることもなど何もなかった。それが、ヨガを始めたことで、こ  
うも世界が開けるとは。甘い射精の余韻に満たされながらも、胸に満ち満ちる幸福感  
を嘸み締めた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!